

生と死を見つめて

「生の掟」と「生命にしがみついて」の比較

芳川 敏博（京都府城陽市）

はじめに

20世紀最大のロングセラー作家と言われるアメリカの小説家ジャック・ロンドン（1876 - 1916）は動物作家としてよく知られているが、生と死の問題にも真正面から取り組んでいる。

生と死をテーマとする小説の中で、「生の掟」「The Law of Life」（1901）と「生命にしがみついて」「Love of Life」（1905）を取り上げ、ロンドンが時代の変遷と共に、どのように生と死を考えるようになっていったか、比較検討を試みる。なお、本稿の引用やページ数はジャック・ロンドン著、辻井栄滋・大矢健共訳『極北の地にて』（新樹社、1998）に基づいている。

上記の2作品に共通した環境は、極北の地であるアラスカの雪に覆われた厳寒の気候である。その想像を絶するような寒さを、「焚き火」では次のように描写している。

「男は、零下50度では唾が雪の上に落ちてパチッと鳴るのを知ってはいたが、今のは空中で鳴ったのだ。」(p.180)

「歩きながら、二股手袋の甲の部分でほお骨と鼻をこする。この動作を反射的に行ない、手は時々交代する。ところがいくらこすっても、動きを止めるとたちまち、ほお骨が麻痺し、次の瞬間には鼻の先が麻痺してくるのだ。」(p.184)

「生の掟」における生と死の描写と思想

極北の地で、飢餓状態にあり目もほとんど見えない老人が、雪の中で1人残されている。息子が老人に生き延びるための薪の存在を知らせる

ために戻ってくるが、食べ物を求めて老人のもとを去ってしまう。老人は薪の方へ手を伸ばし、次のように自分を慰める。

「そして自分もまた、挿話的な人物であり、いずれ消え去ってしまうのだろう。自然にとっては、どうでもいいことなのだ。自然は、生命に対して1つの務めを与え、同時に1つの掟を与えた。種族を絶やさないことが生命の務めであり、その掟というのが死なのだ。」(pp.44-45)

老人は、薪を1本注意深く火の上に置いて、ある冬、クロンダイク川の上流で自分の父親を置き去りにしたことなどを思い出した。その後、老人は、また1本薪を火の上に置いて、過去の追憶へとさらに深くもどって行った。そして大飢饉のとき母を失ったことや、大鹿が抵抗の後狼たちに噛み殺されたこと、物が豊富にありごろごろして喧嘩をしていたこと、一族の長になり白人を殺したことなどが走馬灯のように思い出された。

火が消えて寒さが身にしみるようになり、老人は我に返り薪を2本継ぎ足した。そして、余命が短いことを知り、息子がもっと薪を集めてくれていたり、犬と一緒に食料を持って戻ってくれないかと妄想をした。

そうしているうちに、狼たちに囲まれているのに気づき、現実には立ちかえった。そして、燃えている薪を火の中から1本取り出したが、飢えて群れをなしている狼たちには効果はなかった。老いた大鹿の最後の踏ん張りを思い出したが、結局、運命だと諦め、燃えている薪を雪の中に落とし、死を受け入れた。

「生命にしがみついて」における生と死の描写と思想

極北の地で男は足首をくじき、金に目がくらむビルという男に置き去りにされた。さらに男は足の指を岩棚にぶつけ、すっかり疲れ弱ってしまった。男はその後、極度の空腹に襲われたが、トナカイ、ライチョウ、小魚、沼イチゴなどを食べ、必死になって生き延びようとした。

男にとって食べることは生きることであり、理性的になっていた。その様子を次のように表現している。

「どうやら胃は、うたた寝をしているものと見える。魚を生のまま細心の注意を払って噛みこなす。食べるということは、まったく理性的な行為になっていたからだ。食べたい欲求はまるでないのに、生きるためには食べないといけないということを心得ていたのである。」

(p.131)

男が理性的な行動をとったのは、1) マッチの数を数えたこと、2) 食べ物を次の食事のためにとっておいたこと、3) 時計のネジを巻いたこと、4) 金などのいらぬものを捨ててしまったこと、5) 湯を飲んで休息したこと、などである。このような男の理性的な行動は、病気の狼と闘う前にも見られる。

「疲れ果てているくせに、生命は死ぬのを拒むのだ。死ぬのを拒むからこそ、男はなおも沼イチゴや小魚を食べ、湯を飲み、病気の狼を油断なく見守っているわけである。」(p.143)

以上のような冷静な判断と、次のような必死に生きようとする本能が、最終的に病気の老狼に勝ち、生き残ることにつながった。男の理性と必死に生きようとする本能は、救出された後も変わらなかった。

「半マイルもはって行けないのがわかっている。それでもなお生きたいのだ。さんざん苦勞をなめてきたあげくの果てに死ぬなんて、理不尽だ。」(p.146)

まとめ

以上考察してきたように、主人公や設定を少しずつ変えながら、「生の掟」(1901)と「生命にしがみついて」(1905)は、2通りの生と死を表現している。「生の掟」は最終的には死を運命として受け入れた。一方、「生命にしがみついて」は、最後まで死をあきらめないで救出された。前者の作品を「静」とするならば、後者は「動」と言えよう。

何が「生」と「死」を分けたのか。「生の掟」では、複数の元気の狼が

相手であり、生きるということが観念的で非常に消極的であった。それとは逆に、「生命にしがみついて」では、一匹の病気の老狼が相手であり、必死に生きようと理性的に行動した。

2つの作品は、ダーウィンの「自然淘汰」理論とスペンサーの「適者生存」理論に基づいている。厳しい自然環境の中で生き延びるためには、十分な食料、焚き火、仲間だけでなく、人間の英知と必死に生きようという意欲が大切なのである。そうでなければ、最悪の環境から身を守ることができなくなり、死に向かうことになる。

読者はこれらの作品を読むことにより、生きることをより深く考えるようになる。JR西日本の電車転覆事故のような現代の厳しい社会環境の中で、人々にとって何が一番大切であるかということ人類の英知を結集して熟考する必要がある。

訳者の辻井氏は、「文学は生きることを考える営みである」と述べている。ロンドンでは死と隣り合わせの生活から、常によりよく生きることを意味を考え、自分の作品に表現し、100年後の読者に強く語りかけているのではないだろうか。